



出初式で行われた、消防団による一斉放水

平成の町火消し

いながわ

特派員報告



鎌屋 郁子



松永 ひさみ

猪名川町消防団の活躍

冬は空気が乾燥し、火災が発生しやすい季節です。実際、町では今年に入ってから4件の火災が発生しています。消防署は24時間体制で町内における火災などの災害や救急に備えています。また、全国ほぼすべての市町村には、古くから消防団があり、消防署と連携して地域を守っています。

今回は地域に密着した消防団にスポットをあて、その活躍を紹介します。そして皆さん一人ひとりの防火、防災意識を高めていただきたいと思います。

消防団の始まり

「町火消しから消防団へ」

消防団の始まりは、江戸時代にさかのぼります。この時代、街の過密化が一気に進み「火事とけんかは江戸の華」とたとえられるほど、江戸の町では火災が多発しました。

享保3年(1713年)8代將軍徳川吉宗の命を受けた、江戸南町奉行大岡越前守忠相が、町民のための本格的な消防組織として「町火消し」を創設。時代劇で有名な「いろは48組」がこれにあたり、現在の消防団の始まりといわれています。

地域に密着した消防団

消防団は「自分達の地域は自分達の手で守ろう」という

考えのもと、地域の有志によって組織されています。ボランティアの性格の強い組織ですが、消防署と並ぶ市町村の公的な消防機関です。団員はふだんはそれぞれの仕事に従事する一方、火災・災害の発生時、訓練・災害警戒時に出動する特別職の地方公務員でもあります。

猪名川町の消防団は、昭和14年、中谷村、六瀬村警防団として発足しました。現在では500人の団員が、31分団に分かれて活躍しています。すべての分団では、小型動力ポンプ付積載車を保有し、日頃から訓練・点検などを行い、非常時に備えています。火災・災害の規模によっては、地域以外の分団が、応援体制

もしあなたの家で火がでたら！

まず大声で家族や近隣の人に知らせましょう。恐怖で声が出ない場合は、鍋や缶をたたいて大きな音で知らせます。

初期消火の限界は、一般的に「天井に火が届くまで」と言われています。わずか1～2分の間ですが、この間に消火できれば火災を食い止めることができます。

《消火方法の例》

- ストーブ**・・・消火器がない場合は、濡れシーツで覆いさらに水をかけて消火（完全に火が消えるまでは、シーツをめくらないこと）
- カーテン**・・・引きちぎってから消火（炎が上に燃え上がるのを防ぐ）
- ふすま**・・・蹴り倒してから消火

《消火方法の例》

- 着衣に火がついたら**・・・地面に横になって、転がるようにして消す。立ったままだと勢いよく上に燃え広がり、全身やけどになってしまう

※いずれも基本的には消火器を使います。初期消火ができないと判断したら避難し、速やかに119番通報を！



をとって出動することもあり、消防団は消防署とともに、なくてはならない組織です。また、猪名川町の新興住宅地には消防分団はありませんが、火災などが発生した時には、近隣の消防分団が消火活動にあたる体制が整っています。

消防団長 福田富夫さんに伺いました

私が入団した頃は「村の男は地域のために消防団に入つてやっとな人前」と言われるような時代でした。私も当然のように入団し、今年で35年目になります。今では、人それぞれ価値観も変わり、団員の確保も容易ではありません。しかし、自分の地域を自分達で守るという意識は絶対に忘れてはならないものです。また、消防団は組織で活動するため、規律と秩序が重要です。今後、今まで以上にこれら

を高める訓練を行い、団員の士気を上げ、活動中のけがや事故防止につなげていきたいと思っています。また、そんな団員を見て町民の皆さんも防火・防災の意識を高めて欲しいと願っています。

北田原分団



北田原分団は、団員21人中大半が20代から30代前半という若々しい分団です。分団長の有家さんは「みんな自主的に活動しますし、仲間意識が強くまとまっていますよ」と、胸をはります。

2月8日、分団による北田原の田んぼのあぜ焼きが行われました。あぜ焼きは火を使うことから危険を考慮して、自治会が分団に依頼するようになったもので、毎年恒例の行事。今年も早朝から団員が集まりました。風向きに注意しながら団員が灯油を入れた竹筒で草に火をつけると、あぜが赤く燃え出し白い煙が大きく上っていきました。

朽木分団

朽木婦人防火クラブ

朽木分団と共に朽原と木間生地区を火災から守っているのが朽木婦人防火クラブ22人です。これは、昼間地域にいるのは女性が多いという実情から、婦人会を母体として生



まれたもので、町内には他にも東山と杉生北の2つがあります。

2月8日、朝8時から、分団による定期点検と併せて婦人防火クラブのポンプの点検が行われました。今回参加された2人は「家に消火器を置くことは、防火の基本です。消火訓練のときなどに、実際に使ってみるといいですよ」と語られました。

共に守る

島分団



2月3日の朝、島分団はポンプ車の定期点検を行いました。川から水をポンプで吸い上げ実際に放水するという月2回の点検は、いざという時に備えての大切な訓練でもあります。島では、2月に2回火事が発生。幸い、消防署と消防団による敏速な消火活動により類焼には至りませんでした。

島分団は総勢16人で活動を行っており、半数は転入者です。5年前、尼崎から越してきた藤本さん(写真左)もその一人。「地元の人と交流できるし、友達もできて楽しいですよ」と、意欲的に分団の活動に取り組んでおられました。

編集後記



地元で生まれ育った人にとって、消防団はなじみ深いものだと思います。しかし、そうでない私達には初めて知ることばかりでした。地域はこうして火災や災害から守られているのです。

災害時には隣近所や地域の人々の協力が不可欠です。ふだんから、地域は自分達で守るという気持ちをもみなが持ちたいものだと思います。

【いながわ特派員